Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-08-03

金史良「光冥」論 : 在日朝鮮人の階級的分裂と「私」の苦悩

金, 善泰

(Citation)
阪神近代文学研究,25:31-44

(Issue Date)
2024-05-31

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100490265

金史良「光冥」論

――在日朝鮮人の階級的分裂と「私」の苦悩――

金　善泰

一

金史良は「光の中に」（『文藝首都』一九三九年十月）でデビューした約一年後、「光冥」（『文學界』一九四一年二月）を発表した。朝鮮の知識人である「私」を通して、東京における朝鮮人を描いた両作は、彼ら在日朝鮮人の連帯を題材にしながらも、文壇の評価は相違点を見せていた。

芥川賞の選考に際し、川端康成が「作者が朝鮮人であるために推薦したいという人情が、非常に強く手伝っている」と述べたように、[1]「光の中に」は朝鮮人作家による「国語」作品として評価された。対して「光冥」の発表まもなく、徳永直は「『光の中に』の最初の素朴な強さまで立ち直ってゐない」[2]と本作を評価している。徳永が「光冥」に金史良の文学的転換を見出したのは、「内地に住む朝鮮人の生活」について、「激情や興奮をしひても殺さうとさへしてゐる」ような「冷静な態度」[3]で描いたと述べた石田英二郎の評価を、作者の文学的妥協として捉えたからである。後に安宇植は、一九四一年以降の金史良は、かつてのような「社会に対する意欲や情熱」を失い、民族主義的な傾向を断念したと論じ、「光冥」をその現れとして捉えた。[4]

本作は、日本式に名を改めたにもかかわらず苦痛に陥った在日朝鮮人一家を描いた作品である。とくに「内鮮一体」の政策に準ずる内鮮結婚を題材としている点が注目される。近年では日本と韓国の研究者により、本作のこうした点に関して、より多角な研究が進んでいる。南富鎮は本作について、植民地同化政策としての「創氏改名」が内鮮結婚の矛盾や内地での朝鮮人差別の解決にならなかったことを浮き彫りにしていると指摘する。[5]尹大石は、当時の朝鮮の文壇では、内鮮結婚を肯定的な「光」としてしか描くことができない状況にあったのと比べて、本作は内鮮結婚の「冥」を比較的自由に描くことができたと指摘し、内鮮結婚の「光」と「冥」を描いた作品として本作を定

立する。[6]

このように近年の研究では、植民地状況において、民族主義の意志を断念した表徴として「光冥」を解釈する従来の見解を更新し、帝国主義の同化政策の「内鮮一体」の矛盾を暴いた作品として、改めて本作の民族主義の傾向に注目している。

本作に関するこのような解釈は、金史良を民族主義的な作家として捉えるという前提に立つ。しかし、本作の主題は、民族主義のイデオロギーとして一義的には還元できない。作品のあらすじを見ておこう。「私」は、下町に住む姉の家に向かう道中で、坂の上の清水という人の家の前に立っている二人の朝鮮人の少女を見かける。清水は内鮮結婚をした朝鮮人であり、彼らは朝鮮人の女中「とよ」に暴力を振る舞い、彼女はついに逃げてしまう。女中の失踪に巻き込まれ、普段から女中と交流があった朝鮮人の苦学生「文」が逮捕される事件が起こる。これを解決するために、彼を訴えた清水のもとを訪れた「私」は、彼らも日本社会において、差別されている被害者であることを知る。「私」との面会により、自らの行動を反省した清水は、文についての訴えを取下げる。彼が釈放された日の夕方に空襲が起こり、その危機の状況のもとで、連帯する人々の姿を見た「私」が奇妙な感動を受けるところで物語は終わる。

梗概から窺えるように、本作では先行論で指摘された帝国主義に対する警戒が描かれていることは否めない。しかし、本作は、日本と朝鮮の民族的対立からは距離を置いている。作中で在日朝鮮人の内部における葛藤は、内鮮結婚を選んだ朝鮮人と知識階級の朝鮮人との対立を通して描かれているのである。

このような朝鮮人の内部の分裂は、当時の内地と朝鮮の文壇での「内鮮一体」における「国語」問題に関する議論によって示唆される。一九三九年一月の『文學界』には、座談会「朝鮮文化の将来」が掲載されている。朝鮮人作家が朝鮮語で創作することについて、村山知義や林房雄らの日本人作家は、「政治的問題」すなわち日本に対する抵抗として捉えている。それに比べて、兪鎭午・李泰俊らの朝鮮人作家は「朝鮮独自の文化」のために母国語（朝鮮語）を使用することを主張した。

この座談会に内地側の朝鮮人文学者として参加したひとりに、張赫宙がいる。彼は金史良と同じく、日本文壇に登場する際、朝鮮民族の苦悩を描き出すことを志向していた作家である。彼は「朝鮮語のものを内地語に翻訳」することによって、朝鮮文化が内地に受容されることを強く肯定し、「国語」としての日本語による創作を推進した。張赫宙の言説は、あくまでも植民地状況の下で朝鮮文化を確保することが目的であったが、朝鮮語の使用規制に加担し、日本の朝鮮文化の抑圧に妥協してしまった朝鮮の知識人の矛盾を露呈する。この座談会を考察した任展慧は、作家たちが朝鮮文化の普及のために想定した大衆すなわち読者には、「朝鮮語しか読むことのできぬ多数の朝鮮人「大衆」の存在」が含まれていないと指摘している。[7] 日本人にせよ朝鮮人にせよ、植民地下の知識人の多くは朝鮮人大衆を視野に収めることに失敗していたのである。

当時の金史良は、このような状況の下で、「民衆の中に流れ込

み、それに依つて読まれる」ことが作品の創作の最大の課題であり、そのためには朝鮮語による創作が必要であると述べていた。[8] ここには、知識人が創作した文学が民衆に受容されること、すなわち、文学を媒介に知識人と民衆が交流することを実現するには、朝鮮語の使用を通した朝鮮文化の確保が不可欠であるという認識が示されている。

しかし、知識人と民衆との間には、使用言語の問題を超える更なる問題があった。金臺俊は当時、植民地時代の朝鮮文学が低迷する要因として「「インテリゲンチヤ」出身の作家たちの言葉があまりにも「労働者」、「農民」が理解するには、格段に難しい」ものであった点を挙げていた。[9] このような朝鮮文学の孤立は、ひとつには、朝鮮人大衆を置き去りにした朝鮮の知識人の言語的な断絶に起因していたのである。

本作は、朝鮮人の内部の分裂に伴うこのような「大衆」の疎外状況を踏まえて書かれた。「光冥」を収める作品集『故郷』の跋文には、次のように記されている。

> 「光冥」や「郷愁」などにおいては、故郷を愛し且つそれを生かすの途として、私はかねてから主要なテーマとして追究する方向に従ひ、内的真実性を究めようとした。内鮮の一体化はまことに理想的な形で達成されつつある。それには尚種々困難な点を含んではゐようが、切実な課題である。[10]

「光の中に」以後、金史良は、「故郷を愛し且つそれを生かす」ために、「内的真実性」をもとに描いた作品であると述べている。つまり、朝鮮人の民衆的な生活を作品の素材としたのである。これとともに、金史良は、平易な日本語により広く民衆に読まれうる作品を創作することを試みてゆく。

本稿では、「光冥」が物語の展開を通して、在日朝鮮人の内部における階級的な分裂を可視化していることに注目し、平易な日本語の文章により、本作が帝国の差別と民族の葛藤をいかに描き出しているかを明らかにする。その上で、金史良の朝鮮表象における「内的真実性」について考察する。

二

東京に引っ越してきた「私」の姉の一家は、それまで暮らしていた千葉では経験しなかったような差別を受ける。注目すべきは、本作の舞台になる一九三〇年代の東京市が、地方にもまして朝鮮人にとって抑圧的な空間として描かれている点である。本作は、朝鮮人に対する抑圧が子供にまで及んでいることを可視化する。恵ちゃんに向けられる差別に関する「私」の語りを見てみよう。

> 恵ちゃんは気立てがやさしいばかりか、妙に明るい、それに一寸おどけたやうな人好きする性質で、言葉にしても遊びにしても、生えぬきの内地人の子供とちつとも変はらなかつた。何より静かな千葉の町で生れ、近所の子供達と無

邪気に愉快に遊びながら育つたからであらう。だから彼女は東京に出て来てからも、すぐに多くの友達を作つた。糸屋の眼鏡をかけた男の子とも、八百屋の七つになるデブちやんとも、大福屋の鼻垂小僧とも、酒屋のめつから娘とも、床屋の泣虫小僧とも。けれど一旦知れ始めると、子供達は掌を返したやうに意地悪くなつて、ぐるになり恵ちやんをいぢめたり、仲間はづしをしたりして困らした。そのために時々彼女は遠い所を淋しくほつつき廻つて、目新しい子供を見れば話しかけて友達になり、遅くまでそこに坐り込んで遊んで来るのである。

（二章）

明朗で快活な姪の恵ちゃんは「生えぬき」の日本人の子どもと変わるところがなかったため、東京に出てきてすぐに友達を作ることができた。しかし彼女が朝鮮人であることを知った東京の子供たちは、恵ちゃんを虐め始める。ここでは、彼女が朝鮮人であるという民族的な規定性が差別を生み出している。

一九三六年の東京府刊行の社会資料調査には、「東京は、渡航初期に於ける朝鮮人労働者の生活に適当と認められる都市ではない」と明記されている。「旅費の軽額という条件に加へて、産業都市として豊富な労力の需要を必要とする九州関西の諸都市が彼らを吸引する」というのがその理由である。それにもかかわらず朝鮮人労働者の数が、一九四〇年代前後に至って急速に増加した結果、東京では地方都市以上に朝鮮人差別が拡大した。[11] このような差別の背景には、郭炯徳が本作のマジョリティ、すなわち日本人が朝鮮人に恐怖を抱いていると論ずるように、[12] 東京市における朝鮮人の増加が引き起こした外国人恐怖症（ゼノフォビア）の感情があることは否めない。

しかし、本作の朝鮮人の差別を、民族的な差別として一義的に捉えるのは不十分である。「私」は姪の恵ちゃんについて、「丁度土曜なので、恵ちゃんは早くひけて帰つて来たお父さんに連れられて新宿へ出掛けてゐるところだつた。彼女は毎土曜日曜には、父にねだつて必ず繁華街へ連れて行つて貰ふのである」（三章）と述べている。また、作品の末尾近くに配置された防空訓練の場面には、「殊にこの界隈には×××人が多く住んでゐるため、横列の中には背の高く髪の黄色い外人部隊も参加して異彩をそへてゐた」（五章）という叙述がある。このような叙述を通して、物語の舞台は、繁華街である新宿に近接しており、「背の高く髪の黄色い外人」つまりは西洋人が多く居住している場所であることが見えてくる。

当時の東京市の新宿の周辺には、四谷区、淀橋区、渋谷区が隣接していた。一九三五年の東京市の国勢調査によると、東京の外国人数は、淀橋区が七九〇人、渋谷区が五七四人、四谷区が一二九人である。しかし、そのなかの西洋人の数は、淀橋区が一〇〇人程度であるのに比べて、渋谷区は三一八人である。[13] 新宿の周辺において西洋人が最も居住していた渋谷区では、とくに代々木町に外国人が集まっていた。この記録を踏まえると、作中の舞台は、金史良が一九三九年当時に居住していた、東京市渋谷区代々木町と見ることができるだろう。[14]

東京市に住む「私」の前には、相反する二つの集団がある。作品の冒頭近くに、「私」は「アパートの裏手にある坂小路」（一章）を下りて、下町の姉の家へ向かう途中、清水の家の前を通る。ここで描かれているのは、坂の上の清水の一家と、下町の朝鮮人である姉の一家との、住居地域の分断である。このような空間の分割が何を示しているのかについて、「私」が清水の家の前を通る場面を通して見てみよう。

だんだら坂の中途にある古びた小さな門構への傍に、子供を背負つた色の黒い大きな十七位の娘と、女学生服の十四五の娘がぼんやり立つてゐるのを見ると、私はおやつと思つて立ち止りかけたのである。むろんそれも何とはなしに。と同時に、相手の二人の娘は一寸気色ばんだかにみえたが、すぐさま殊更のやうにすましかへつてしまつた。こんな時のいつもの癖でちらつと門札を見やつたが、そこには思ひの外内地人の名前で清水某とかぼそく書いてある。でも、私はふふんといつた気持でそれを真にうけようとはしないで、郷里のものに違ひないときめ込むのだつた。そしてすごすご下りて来ながら、暮しはわりにいいやうだが、一体何をしてゐる人だらう、綺麗な女学生の方は娘なのだらうか、肥つたどす黒い方は、朝鮮から連れて来て間もない女中に違ひあるまいなどと考へた。（一章）

一九三九年に実施された植民地同化政策の一環である「創氏改名」により、大勢の朝鮮人が「内地人」式の名前に変更した。このような時代背景をもとに「私」は、家の前の門札が「清水某」と書かれていることを確認するが、その主人が「郷里のもの」つまりは朝鮮人であることを見抜く。実際、朝鮮人の苦学生の文青年によって、清水が内鮮結婚をした朝鮮人であることが明かされる。清水一家は、朝鮮から連れてきた女中を雇うことができるほど、「暮しはわりにいい」という。

一九三〇年代の東京市では、住居地域が「普通住居地域」と「特別住居地域」とに分けられ、後者は田園郊外地または都市の高級住宅地として開発された[15]。渋谷区でも住宅地帯と工業および商業地帯とが完全に分立し、高燥地に高級住宅、低台地に工場地帯が分布していた[16]。これに即して言えば、本作における二つの家族の配置は、「普通住居地域」に住む労働者と「特別住居地域」に住む中産階級という経済的な階級差を意味すると言えよう。すなわち本作に登場する住居地の標高の高低差により区分されている二つの集団は、それぞれ労働者と中産階級という、在日朝鮮人の中の階級的分断を示している。本作が表現する差別の構造が、民族差別に一元化されないのは、このような朝鮮民族の内部の階級差別が描かれているからである。

千葉から来た姉の家族が過酷な差別を受けることは、地方都市にもまして、東京市が都市政策の下に階級的抑圧を目に見えるかたちで空間化する場所であったことを表している。このように東京市の都市政策は、そこに生きる民衆の階級的分断を可視化することに繋がっていた。次節では、本作で断絶された二

つの朝鮮人の家族のうち、下町の朝鮮人の描かれ方について考察していく。

三

下町に住む朝鮮人の階級意識は、文青年を通して描き出される。朝鮮人の女中が姿を消した事件の後、清水の女房が文青年の部屋に飛び込んでくる。彼女は、文青年の「筆耕プリント用の原稿」を取り上げて、「警察に一言知らせさへすりや、何もかもはつきりすることよ、…それは立派な誘拐ですつて。誰の差金だか位はちやんと知つてますつて。薄のろな女の子に碌でもない入智慧までして…」（三章）と彼を詰問するのである。ここでは、清水の女房により部屋で発見された「筆耕プリント用の原稿」が「碌でもない入智慧」に関する書籍であることが示されている。

安宇植は、本作を金史良の「北京旅行の体験をもとにした小説」[17]として捉えている。とくに文青年の人物造形は、金史良が北京旅行で会った朝鮮人をモデルにしていると見られる。金史良は、一九三九年春に北京を旅行した際、「同じ宿のM君と親しく」なったという。この人物は「昔××〔独立〕運動で朝鮮から亡命した革命家」を父親に持ち、「特務機関にはひつてゐた」という過去を持つ[18]。本作に登場する「文」は、朝鮮式の読みとしては「ムン」であり、「M君」がそのモデルであると考えられよう。これを踏まえて本作を捉え直せば、「碌でもない入智慧」によって窺える文青年の思想は、「独立運動」に関わる革命思想に通じている。

このような思想的な背景を有する文青年は、東京における差別に対抗するため、在日朝鮮人内部の連帯を強化することを望んでいる。朝鮮人の女中の差別に関する文青年の態度を見てみよう。

> 文君は白い歯を見せて苦々しげに薄笑ひしながら立ち上つた。「此頃は殊に女中が僕の家へ往来してゐるのが分つて大変らしいんです。今にきつと何か悪いことでも起りやしないかと心配ですよ」／（中略）文君は突然吐き捨てるやうに、／「実は僕」と云つて私を呼び止めた。彼も何故となく余計忌々しさうになつてゐるに違ひなかつた。「近い中あの清水とかいふ男の所へ訪ねて行く積りなんです」／「行つてみなさい、さうだ、その方がいいでせう」と私はわざとらしい程まで大きい声で応じた。実のこと私達は今先の不快な印象をこの話の中にでも押しつぶさうとして、心にもなく興奮さへしてゐたのかも知れない。けれど私はふと思ふのだつた。（行けば益々こちらがたまらなくなるに違ひない）／「何しろあまりひどいと思ふのです。約束通りに夜学にもやらない、鐚一文も給金は渡さない。おまけに私刑まですると来ては…僕の女房の勤めてゐるセルロイド工場に行つたつて、日に一円はくれますよ」　（一章）

女房がセルロイド工場に勤める文の一家は、朝鮮人労働者であり、彼は清水が朝鮮人女中を差別することに対して怒りを覚える。朝鮮人の女中に、「悪いことでも起りやしないかと心配」する文青年は、清水一家に抗議することを決心する。彼の抗議を引き起こした要因のひとつとしては、清水一家が女中に「鐚一文も給金は渡さない」こと、すなわち労働者の搾取の問題が挙げられている。つまり、文青年の女中に対する連帯意識は、同胞意識と階級意識により二重に規定されている。

黒川伊織は、一九二〇年代以降の東京と大阪で、「朝鮮労働同盟会」が結成された経緯を検証するなかで、日本人と朝鮮人の労働者の階級的連帯が理論的には可能であったとしても、「労働現場では日本人労働者が低賃金の朝鮮人労働者に置き換えられる例が多かったように、日本人と朝鮮人の利害は必ずしも一致していなかったため、民族的結合が選択された」と指摘している[19]。つまり、日本と朝鮮の労働者の組織的連帯は、現実には国際的な方向より、民族主義的な志向をもって現れていたのである。

本作に立ち戻ると、文青年の朝鮮人の女中との連帯には、階級意識とともに民族的な結合への志向が現れている。しかし、民族主義的な連帯を求める文青年にとって、清水一家は朝鮮民族の敵として認識される。文青年の怒りは、こうして日本人と朝鮮人という二項対立の構図とともに、同じ朝鮮人でありながら中産階級と労働者階級との間に横たわる格差を浮き彫りにするのである。

階級的な対立を見せる文青年とは対照的に、「私」は内心では「行けば益々こちらがたまらなくなるに違ひない」と思う。言い換えれば、「私」は文青年が主張する朝鮮人労働者の連帯について、「わざとらしい程まで大きい声」で同調するように見せかけてはいるが、実は共感していない。このような受動的な態度は、「私」が自分自身を朝鮮人労働者として認識していないことを暗示している。むしろ、「私」の階級的な立場は、文青年の民族的な結合の対象から離れているのである。

「私」はこのような不安定で曖昧な立場から、清水一家と関わっていく。清水夫婦という中産階級の朝鮮人は、朝鮮人労働者とは別の思想を持っていた。次節では、中産階級である清水一家について検討する。

四

文青年が革命思想のもとで朝鮮人労働者との階級的な抵抗をとるのとは対照的に、清水夫婦は、日本帝国の同化政策の一環である「内鮮一体」の思想に順応し、朝鮮人を差別する悪党のように描かれている。文青年の言葉だけで清水がどのような人物であるかを想像するしかなかった「私」も、最初に清水と会った時、「火鉢もなく薄寒い四疊半の客間の中には、どてらを着込んだ四十がらみの肥つちよな男が夕刊をひろげたまま踞つてゐた」（四章）と、彼を「薄寒い」部屋のイメージと並置し、悪党のように見ているのである。

しかし文青年と同様に、清水夫婦はかつて朝鮮人に対する差

別の解消に努めていたことが明かされる。朝鮮人の女中を連れてきた理由について、清水の女房が語る場面を見てみよう。

「妾達は子供達のためにいつも住所をかへて転々しました。そして昨年やつと静かなこの坂の上に落着いたのです。すると今度は又あの女中のために、一家の中が滅茶苦茶にされさうなのです。いゝお姉さまとして慕はせ、ややもすると、朝鮮人に対して顔を反けようとする子供達の気持を、少しでもひきとめようとわざわざ連れて来たのに、子供達はついて行かぬばかりか、益々ひどくいやがり莫迦にしますの。それに、それに妾の目の前ではどうしてか主人と長女は、あのとよに対してもつとひどくあたるのです。それであの娘もだんだんつむぢ曲りになつて行き、いよいよ妾はどうしていゝか分らなくなつたのです。しまひには何もかもがあの娘にからみついて行つて、一時もなごやかな時がなく、それにつれてだんだん近所にも一家の内情が知れ渡るやうになりましたの、何よりこれから子供達が気の毒でなりませんわ、子供達が…」（四章）

清水の女房が朝鮮人の女中を連れてきた理由について、朝鮮人に対して差別する子供たちを引き止めるためであったと言う。清水の一家の「朝鮮人に対して顔を反け」るという事情は、作品の冒頭、清水の先妻の女学生が「ひどくいぢめられて来たんでせう」（一章）と文青年が語るところからも窺われる。つまり清水の女房は、家庭内で清水の先妻の子に向けられる差別を緩和したいという母親としての愛情ゆえに、朝鮮人の女中を連れて来たのだと考えられる。鶴丸辰雄は、「光の中に」「光冥」両作の「重点」を「愛情」という要素に見出しているが[20]、本作は、差別に向き合う清水の女房の態度を通して、朝鮮人の差別の解消を志向する愛情を暗示している。

しかし、彼女の意図とは反対に、清水一家は差別の克服のために連れてきた朝鮮人の女中を虐げるという矛盾した状況に陥っている。その事情について、清水の女房は次のように語る。

「やつてみましたの。何もかも。初めてはさういふ理想で、周囲の反対を押し切つて二人も一緒になりましたの。だがそのままではどうしても駄目だつたのです。主人も東京でどんなに苦労したことでせう。大学は出てゐるのに、どこへ履歴書を出しても就職は出来ない。家は借りられない。それでたうとうあの人を妾の家の籍へ入れるやうにしたのです。それからといふもの、あの人は妾に対して何事も卑屈になつたのです。それが又妾を苦しめましたの。やりきれない思ひをさせましたの。それに子供を生んでからは、妾達は尚一層苦しまねばなりませんでした。そのために妾は一時気まで狂ひさうになつたのです」（四章）

清水の女房は、清水が「大学は出てゐる」知識人であっても、朝鮮人であるために就職も家を借りることもできず、生存のた

めの生命線を絶たれようとしてきたと訴える。このような現実的な問題ゆえに、「たうとうあの人を妾の家の籍へ入れる」ことを選ばざるを得なかったのである。

これにより、彼は朝鮮式の苗字を捨て、「清水」という日本式の苗字を名乗ることになる。清水の内鮮結婚は、朝鮮人としてのアイデンティティを傷つけることにつながり、彼は日本人に対して「卑屈」な態度を取るようになる。「主人と長女は、あのとよに対してもつとひどくあたる」と清水の女房が訴えているように、日本人に対して徹底的な劣位に立たされた清水一家は、内部にも不均衡を含む歪んだ家族である。彼らは、朝鮮人に対する日本人の民族主義による差別を自ら内面化している。清水はこうして、常に日本社会から排除されていることによる心理的な劣等感に囚われるのである。

正常な家族関係を保つことができなくなった清水一家の劣等感は、彼らをより強固な内鮮融合に転回させていく。清水が説く「内鮮融合」の思想に関する「私」の語りを見てみよう。

私は軽く反らしながら今度は男の方へ水を向けようとした。ところが私はその時烈しい自己嫌悪の情に打ちのめされて、言葉が出なくなつた。私はたゞかういふ意味のことを云ひたかつたのである。只今あなたは内鮮融合といふことを云はれた。成程今の時その問題を身をもつて痛切に考へ苦しまない人は一人もゐないことであらう。だがあなたはあなた達の女中に対するああいふ態度が、真に内鮮融合を計る所以だと思ふのかと。しかし私はやつと呟くやうにかう云つただけだつた。「…朝鮮人の娘だから牛や豚のやうに取扱つてもいゝ。給料も払はなくて済む。けれどただ一つ、あの娘が朝鮮人として朝鮮人達とつき合ふので、あなたの方が迷惑で困るといふのでせう」　（四章）

日本社会の抑圧によって清水一家に強いられた「内鮮融合」すなわち「内鮮一体」の思想は、「朝鮮人達とつき合ふ」ことを拒否することに繋がっていた。自らに刻まれた朝鮮性というスティグマを削除しようとする一家は、朝鮮人の女中に対して暴力的に「ああいふ態度」をとることになる。こうして清水一家は朝鮮語、朝鮮文化を排除することに導かれたのである。

このように清水夫婦の「内鮮一体」の思想には、朝鮮性の否定が潜んでおり、これに対して「私」は、朝鮮性を抑圧するための暴力に抵抗する態度を示す。しかし、これは朝鮮文化を保つことが困難であった当時の潮流のなかで、朝鮮の知識人が内面化していた問題であった。このような問題に直面した「私」は、「自己嫌悪の情」のゆえに沈黙する。このように清水という人物を通して、本作は、朝鮮人の民衆に対する差別を解消するために努めたものの挫折し、「内鮮一体」の帝国主義的な思想のもとに、朝鮮民衆を排除してしまった在日朝鮮人を描いているのである。次節ではこうした朝鮮人の苦悩に当事者として直面しつつ、そこからは距離を置こうとする「私」の意識について注目する。

五

「私」は文青年と清水のいずれにもコミットせず、彼らの対立から距離を置こうとする態度を保つ。「私」は、清水一家が朝鮮人を差別することを「内鮮一体」の理想を妨げるものとして見ながら、その理想は清水の「家庭の中でこそ、真に成し遂げなければならない」（四章）という考えを持っている。文青年の検挙事件が解決した後の、文青年と「私」の会話を確認しよう。

あの家庭は今の所そっとしておかねばならない。さうしてこそ彼等夫婦も次第に反省自覚し、再び初めの理想のもとに自分達の家庭をたてなほすに違ひないと思つたからだつた。あの家庭をこれ以上滅茶苦茶にしては残酷である。われ等が彼等の内鮮結婚の家庭を肯定せねばならぬ限りにおいては、彼等夫婦こそ正に先駆者的な悲しみや苦痛や困難を一手に嘗めてゐるのだと考へねばならぬではないか。（中略）私は文君にそんなことを話した。事実、私は清水一家のひどいやり口に対しては、心苦しい痛みと憤りを感じてゐるに拘らず、更に心の底では今こそ一切が解決したと思ひ、又清水家も虚偽なもの、恥づべきもの、假面的なものから抜け出て新たに出発してくれることを願つてゐた。とはいへ一方考へてみれば、何しろ莫迦莫迦しくてならなくなり、私は突然のごとく口を噤んでしまつた。（五章）

「私」は二つの家の対立をとりもち、断絶された二つの集団に介入する。ここで注目されるのは、「悲しみや苦痛と困難」を背負う清水一家を「私」が「先駆者」として認識しているということである。「私」は、朝鮮人が「内鮮結婚の家庭を肯定せねばならぬ」という立場を取り、「われ等」朝鮮人が抱えている差別問題を「彼ら」すなわち他者の問題に擬することで、自らが内面化している問題を取り除き、「先駆者」に助けを求める受動的な態度を見せる。

しかし、このような問題の受け取り方が、決して朝鮮人の間の葛藤を解決しないことを「私」は自覚している。その自覚は、清水夫婦の「ひどいやり口」について「心苦しい痛みと憤り」を抱く一方で、「莫迦莫迦し」いというなげやりな感情を「私」にもたらしている。この「莫迦莫迦し」さという醒めた感情は、朝鮮人に向けられる差別を自ら認識する一方で、むしろその問題から目を背け、物事を「解決」したと思い込もうとする「私」の内面の二律背反的な乖離を強調しているのである。

二つの階級が内面化した思想のどちらにもコミットできず、言葉に詰まる「私」は、この体験を通して、自分自身を客観化し、自己懐疑あるいは自己批判の意識に目覚める。対立する二つの共同体の間で板挟みになった「私」は、恵ちゃんの虐めの現場を目撃した後、二つのイデオロギーとは異なる独自の理想に気づいていく。

恵ちゃん自身だつて又遠慮などせずに平然と遊んでくれれ

ばいいではないか。少しもひるまずに、むしろ多勢の子供達をひきづり廻して行くやうなしぶとい子供にどうしてなれないのだらう。さうだ、清水一家の場合でもさうであるやうに、一方が自分を否定することから出発しようとする精神がいけないのだ。一側のものが否定されることに依つて、一側のものの肯定が決して強まるのではない。肯定的なものと肯定的なものの綯交の中にこそ、それが結局は強められるべきであらう。―さうでもしない限り、かういふ環境を、どうして行くことが出来よう。（五章）

ここで相反する思想を持つ「清水」と「恵」を取り上げることを通して、「私」は、自らの内面の二律背反的な思想を相互否定しないことから「肯定的」なものが生まれるという理想を感知している。言い換えれば、「私」の理想が、互いの肯定のプロセスによってはじめて成立するものとして捉え直されている。「私」は、相反する思想を持つ朝鮮人同士の中に介入し、その二つの集団のイデオロギーからは離れた新しい「肯定的」な未来を提示しようとしているのである。

空襲の「サイレンの音」とともに行われる防空訓練の様子を眺めながら、「私」が感動を受ける場面を読んでみよう。

その際私は殆んど幾らも離れてゐない所をすれ違ひさうになりながら、一人の女学生がはにかむやうに私に向つて微笑んだかに思はれた。驚いて見上げればそれは清水の長女だつた。けれども何だか自分にではないやうな気がして傍を振り向いてみると、朝鮮の有名なスケート選手の大学生がそれに答へてにつこりと笑ひながら通つてゐた。私はずーんと胸へ響くやうなものを感じて、思はず立ち止つた程である。四辻の一隅に立つて大勢の人々と共に防火の演習を眺めながらも、私はこのことからして奇妙な感動に身を委ねてゐるのだつた。（中略）一人一人の婦の手に依つて鈴なりに隣りから隣りへと渡されて、火元まで運ばれる。そこが一糸乱れずに緊張した中に行はれる光景は状観でもあつた。（中略）私はこの列の一所に清水の女房も加はつて、熱心な面持で馬穴を隣りへ手渡してゐるのをそれとなく見付けた。ところが又驚いたことは、丁度その隣りの隣りには偶然にも姉が待機してゐてそれを待ち受けてゐる。（五章）

ここには、清水の長女すなわち先妻の子が、朝鮮人の男性と結ばれていることが描かれる。家庭内では朝鮮人を否定してきた一家の娘が朝鮮人と結ばれたことを「私」は肯定的に認めている。その肯定性は「一糸乱れずに」に防空訓練する光景によってイメージ化される。ここでは、そうした肯定的なイメージの連鎖によって、長女の朝鮮人としてのアイデンティティの回復と、朝鮮人の内部における階級的な連帯が一体化するかのように表象される。このような連帯の可能性は、「私」に感動的な場面として描かれているのである。

しかし、この理想があくまで戦火のもとでのみ実現されるということは、「私」の感動の矛盾あるいは限界を示す。言い換えればここでは、在日朝鮮人の内部の階級が日常的に内面化している葛藤が、空襲という非常事態によって隠蔽されているとも言える。防空訓練の団結感は階級の葛藤を隠し、あたかも問題が解決されたかのような連帯が、「私」の視点を通して描き出される。この状況を受けて、本作の最後は「火は煙を上げながら尚ほ光の足りない赤さで燃えてゐた」（五章）と結ばれる。この「光」は、あくまでも戦火という例外状態によるものであり、光としては「足りない」ものでしかない。つまり、作品のタイトルに選ばれた「光」と「冥」の混在は、朝鮮人に潜んでいる分裂の解決という「私」の理想と、その理想への到達不可能性が同時に提示されているのである。

六

「光冥」は日本のファシズム戦争の時期に創作された。岡沢秀虎が本作について、「「私小説」の影響を非常によく受けてゐる」[21]と述べているように、日本文壇では金史良の作品を日本人の文学として捉えようとしていた。

しかし、本作の発表当時、金史良は「自分が血を異にし、又お互ひの文学の伝統も違ひ、それから日本文学に喰ひ付いて積極的に学び取らうともしなかつた」と述べ、「やはり私は朝鮮人の文学をやつてゐるのだと考へる」と語った[22]。ここから窺われるのは、自らの作品を「朝鮮人の文学」として確立しようとする、作者の志向である。内鮮の一体化が政治を超えて文学的な側面にまで推進されるなかで、抑圧された朝鮮人を日本の文学の内側から描く方法を模索していた金史良の苦悩が本作には刻み込まれている。

本作が「私」の視点を通して描き出すのは、日本において差別された在日朝鮮人の内部の階級的な葛藤である。朝鮮人労働者として描かれる下町の人々は、差別に向き合い連帯を行う民族主義的な集団である。一方で、清水は社会的な差別による挫折を経験し、帝国主義に跪いた朝鮮の知識人・中産階級を代表する。こうして民族の内部に断絶が起き、彼らの中に「私」が介入して行くのである。

前述の通り本作と「光の中に」は、「私」によって、知識人と民衆の連帯への希望が語られる点で共通している。しかし「光の中に」では、知識人と民衆の連帯を見せているにすぎず、朝鮮人に向けられていた差別の解決の見通しは書けなかった。「どうしてもすつきり出来ないもの[23]」があると述べたように、金史良も「光の中に」のもの足りなさについて自覚していた。その自覚のゆえに発表された作品が「光冥」である。ここでは在日朝鮮人の「労働者階級」と「知識・中産階級」の葛藤に解決をもたらすことが、「光」というイメージで描き出されている。

しかし、解決の「光」は、「冥」という対比的なイメージの混在を通して表現される。この点から言うと、「光の中に」に続く「光冥」は、単なる文学的転換による挫折の結果ではない。本作

は、朝鮮の民衆を描き出すことによって、自らの内面の思想的な懐疑、すなわち作者の朝鮮表象に対する「内的真実性」について問い続けていた金史良の苦悩を表現した作品であると言えるのではないだろうか。

＊金史良「光冥」の引用は初出「光冥」（『文學界』一九四一年二月）による。

＊本稿の原文引用は、原則として旧字は適宜新字に改めた。

＊本研究は、二〇二三年度阪神近代文学会夏季大会（於・甲子園大学）における研究発表に基づく。会場でご教示いただいた方々には、この場を借りて深く御礼申し上げる。

注

（1）「選評」（『芥川賞全集　第二巻』文藝春秋、一九八二年、三九七頁）

（2）徳永直「文芸時評」（『北海タイムス』夕刊、一九四一年二月八日）

（3）石田英二郎「二月の小説」（『新潮』一九四一年三月）

（4）安宇植「「光の中に」から「親方コブセ」まで」（『金史良――その抵抗の生涯――』岩波新書、一九七二年、一一二頁）

（5）南富鎮「金史良文学に現れた創氏改名」（『昭和文学研究』昭和文学会、一九九九年三月）

（6）윤대석「내선결혼의 빛과 어둠」、尹大石「内鮮結婚の光と闇――金史良の「光冥」」（『先清語文』ソウル大学校国語教育学科、二〇二二年八月）引用は拙訳による。

（7）任展慧「植民地政策と文学」（『法政評論』法政大学文化連盟、一九六三年六月）

（8）金史良「朝鮮文化通信」（『現地報告』一九四〇年九月→『金史良全集Ⅳ』河出書房新社、一九七三年、二六頁）

（9）金臺俊「文芸運動後四十年間의小説観」、「文芸運動後四十年間の小説観」（『朝鮮小説史』清進書館、一九三三年、二〇五頁）引用は拙訳による。

（10）金史良「跋　故郷」（『故郷』甲鳥書林、一九四二年→『金史良全集Ⅳ』河出書房新社、一九七三年、六八頁）

（11）「在京朝鮮人労働者の過去と現在」（『在京朝鮮人労働者の現状』東京府学務部社会課、一九三六年、二四頁）

（12）곽형덕「일제 말 재경조선인의 행방」、郭炯德「日帝末の在京朝鮮人の行方」（『金史良と日帝末の植民地文学』ソミョン出版、二〇〇三年、二二五－二三〇頁）引用は拙訳による。

（13）「外地人・外国人」（『東京市国勢調査附帯調査統計書』東京市、一九三八年、四八三頁）、「外地人及外国人」（『東京市国勢調査附帯調査　昭和一〇年　淀橋区』東京市、一九三六年、二四頁）、「外地人及外国人」（『東京市国勢調査附帯調査　昭和一〇年　渋谷区』同様、四二頁）等を参照。

（14）安宇植「金史良年譜」（『金史良全集Ⅳ』河出書房新社、一九七三年、三八六頁）

（15）中島康比古「一九三〇年代東京における郊外統制構想」（『「大東京」空間の政治史――一九二〇～一九三〇年代』日本経済評論社、二〇〇二年、一〇五－一三二頁）

（16）「産業と区民生活」（『新修渋谷区史』東京都渋谷区、一九六六年、二二九八頁）

（17）安宇植「民族主義作家の誕生」（『金史良――その抵抗の生涯』岩波新書、一九七二年、六三頁）

（18）金史良「エナメル靴の捕虜」（『文藝首都』一九三九年九月）

（19）黒川伊織「「一国一党の原則」と外国人コミュニスト」（『戦争・

革命の東アジアと日本のコミュニスト』有志舎、二〇二〇年、一一八頁）

（20）鶴丸辰雄「愛情の試錬」（『文藝首都』一九四一年六月）

（21）岡沢秀虎「文芸時評」（『早稲田文学』一九四一年三月）

（22）金史良「内地語の文学」（『読売新聞』夕刊、一九四一年二月一四日）

（23）金史良「母への手紙」（『文藝首都』一九四〇年四月）

（きむ　そんて／神戸大学大学院博士課程前期課程）